

通天閣

大阪の通称「ディープサウス」の中心にそびえ立つ高さ 103m の通天閣は、大阪を代表するランドマークのひとつです。通天閣の物語は、20 世紀における大阪の苦難と再生を反映しています。

最初の通天閣は、高さ 64m で、1912 年に開催された博覧会の跡地を開発して作られた地域「新世界」のアイコン的存在でした。新世界の北半分はパリ、南半分はニューヨークのコニーアイランドをモデルにして開発されました。通天閣はこの二都市の融合を体現して凱旋門とエッフェル塔の要素を組み合わせたデザインで建造され、南側に建てられた遊園地ルナパークとロープウェイで結ばれていました。夜になると塔は最先端の電飾で光り輝き、街の繁栄と近代化を誇らしげにアピールしていました。

しかし、ルナパークは 1925 年に閉園し、さらに 1943 年に通天閣が火災で損傷すると、修理は行われず建物は解体され鉄鋼として使われました。通天閣はその後 10 年以上にわたって街並みから姿を消していましたが、希望と復興のシンボルとして通天閣の再建を求める市民運動を受けて、1956 年に現在の建物が完成しました。設計者は、この 2 年後に東京タワーを建設することとなる内藤多仲でした。

陽気な混沌体験 [A Cheerfully Chaotic Experience]

通天閣の内側は、陽気な混沌に溢れています。来場者は地下から入場する前に、まず通天閣の真下のフレスコ画（1912 年制作の原画の復元）を鑑賞します。地下には大阪の有名な菓子メーカーの運営するアンテナショップが並ぶ「わくわくランド」があります。また、このフロアには、全長 60m のリ्यूージュに似たアトラクション「タワースライダー」の入り口もあります；この滑り台に乗れば、2 階からエレベーターの周りを螺旋状に下り、わずか 10 秒で地下に帰って来ることができます。タワースライダーは 2022 年にオープンしました；通天閣は現在も訪れる人を新しい思いがけない方法で楽しませる努力を続けているのです。

「わくわくランド」の上階はアンダーフロアで、ここには大阪の人気ヒーロー「キン肉マン」のコーナーや通天閣の公式グッズショップ、面白い看板で知られる付近の繁華街「ジャンジャン横丁」を子供でも楽しめる形で模したエリアがあります。

アンダーフロアからは、展望エレベーターで展望台へ上がります。最も高い場所は「天望パラダイス」と呼ばれる 94.5m の野外展望台です。その下には、通天閣のマスコットキャラクター

「ビリケンさん」を祀った「黄金の展望台」（87.5m）があり、そのさらに下には、望遠鏡が設置されている「光の展望台」（84m）があります。どの展望台からも、北に大阪城、西に大阪湾にかかる湊大橋など、新世界周辺の素晴らしい景色を見晴らせます。

展望台からエレベーターで降りると、通天閣と新世界の歴史を紹介する「ランディング」フロアに停まります。このフロアでは、通天閣の全盛期を再現したジオラマの展示や、当時の写真や通天閣の誕生から現在の姿への生まれ変わりまでを紹介するショートムービーの上映が行われています。

ビリケンと新世界のスピリット

通天閣はユニークで驚きに満ちあふれた場所ですが、特筆すべきは、いたるところで「万事あるがままの神[God of Things as They Ought to Be]」であるビリケンさんを見かけることです。このイタズラっぽい小鬼の姿をしたビリケンさんは、通天閣のみならず大阪全体の非公式なマスコットになっていますが、多くの人はビリケンさんが日本発祥でないことを知ると驚きます。

ビリケン は 20 世紀初頭、アメリカの画家フローレンス・プレッツが自身の夢に出てきたものをもとに創作したキャラクターです。この奇妙な生物はすぐに人気を博して日本でも知られるようになり、アメリカのキッチュ・アートとして新世界で（冗談半分に）祀られるようになりました。ビリケンが取り込まれた経緯は、新世界が世界中の流行やファッションを受け入れ、それに大阪ならではのアレンジを加える場所であることを象徴しています。